



No. 98

新見市立哲西図書館

図書館運営の新しい試み



一 新見市立哲西図書館の沿革

旧哲西町（人口三千二百人）が「ワンストップサービス」の実現をめざして整備した庁舎・診療所（内科、歯科）・図書館・保健福祉センター・生涯学習センター・文化ホールを一体化した総合施設「きらめき広場・哲西」のメイン施設として、

平成十三年十月にオープンした。

「出会いの場・憩いの場・賑わいの場の創出」という総合施設のコンセプトから、正面玄関に続くエントランスを一部に取り込み、壁や間仕切りのないオープン構造の図書館となっており「本と人、人と人との出会いを演出する」文字どおり開かれた図書館として歩みが続けてきた。

年々利用も増加し、平成十五年度県下公立図書館サービス指標では各指標とも上位を独占、以後、利用が延伸しており、現在の蔵書資料数は六万四百五十五冊で、指定管理者の特定非営利活動法人NPOきらめき広場が管理運営にあたっている。

職員は、すべて指定管理者の職員で、館長一名、司書一名、司書補助パート職員三名（内一名司書資格保有）、非常勤臨時職員一名が従事、年末年始（十二月二十九日～一月三日）と蔵書点検日（四月中旬四日間）の計十日を除き、残り三百五十五日を年中無休（午前10時～午後七時開館）で運営している。

また、おはなし会、子ども映画会を月各一回、乳幼児一時預かりサービスを月二回実施しており、平成十七年中の貸出冊数七万四千七百八十八冊（貸出人数一万七千二百一十一人）と記録更新中である。

二 指定管理者制度導入の経緯

平成十七年三月三十一日発足した新見市は、旧新見市・哲西町・大佐町・哲多町・神郷町が三年余にわたる協議を経て誕生した市であるが、合併協議最終の図書館サービスの統一についての検討を行う詰めの段階で、新見市図書館と哲西町図書館の運営（図書館の職員体制、開館時間等）に大きな差があるという難題に直面、特に、哲西図書館の午後七時までの開館時間を短縮することは、サービスの根幹をゆるがすこととなる（午後五時から午後七時の間に一日の二十四%を貸出）ため、サービス低下にならないさまざまな方策が模索されたが合意が難しく暗礁に乗り上げることとなった。

直営のまま二制度の並存は不可能との結論で、図書館指定管理者制度の導入について、先進の北九州市を訪ねるなどして研究を続けていた折、奇しくも旧哲西町内で進められていたまちづくりのためのNPOが法人化され、NPO法人となったと

ころであったことから、指定管理者の打診をすることとなった。

このNPO法人は、特色ある地域づくりの継続と新しい時代に即応できる住民活力の結集を目的に設立されたもので、図書館運営は想定外のことであり紆余曲折はあったが、地域づくりの一環として活動に加えることで法人総会の合意を得、旧哲西町において三月一日付で指定管理者の指定をおこない合併後の新市に引き継ぎ現在に至っているものである。

三 指定管理の内容

指定管理者制度への移行時の問題として、図書館職員の身分移管の問題があったが、館長（当時の教育長併任）以外は、嘱託司書とパート職員で業務を行っていたので、そのままNPO法人職員に採用という方法でスムーズに移行ができた（館長は、NPO理事が就任）。

指定管理対象業務の内容は、
イ) 指定期間

平成十七年三月一日から平成二十年三月三十一日の三年間

ロ) 業務

- ・館長業務（施設の運営統括、関係機関・団体との連絡調整）
- ・窓口サービス業務（受付、案内、登録、貸出、返却、レファレンス）
- ・蔵書管理業務（選書候補推薦、



蔵書整理、配架、点検、補修、統計)
 ・施設管理業務(施設の開閉、安全管理、防災、清掃、警備)
 ・庶務業務(経理、人事、広報)
 ・読書奨励業務(読書会、講演会、読み聞かせ、子育て支援、展示、ブックリサイクル)
 ・複写サービス業務
 ・ボランティア活動支援業務
 ・管理費用
 資料購入費の下限を設定し年次協定書で定める。
 となっており、購入資料の選定作業は委託業務に入っているものの、決定権は市教育委員会に残されている。(偏った選定に陥らないための配慮)



四 指定管理者制度導入の効果
 「住民サービスの向上と経費の削減」という指定管理者制度の目標を実現するため、サービス向上に努めている。(市民から信頼・支持される図書館サービスを提供できなければ継続性が担保されない)ので、職員意識も高揚している)
 ・休館日を最小限にした(毎週木曜日の休館日を廃止し、年間三百五十五日開館を実現)
 ・月二回の乳幼児一時預かりサービスの開始(NPO法人の子育て支援活動と連携)
 ・図書館ボランティアの育成
 ・図書館情報の提供(NPO発行の月刊地域情報誌に、図書館ページを常設)
 など、NPO活動と協働した柔軟かつ臨機応変なサービス環境を作り出すことができた。

これらにより、館の評価が高まりつつあり励みになっていくが、今後、「知りたいこと調べたいことがあつたらまず図書館へ」を合言葉に何でも相談できる地域情報センターの役割を積極的に担っていきたいと考えている。

五 指定管理者制度の問題点

公益的サービスの新たな担い手として期待されているNPO法人等が、公共性の高い図書館の指定管理者となることについては、肯定してよいと考えるが、指定期間が三年と短期のため、スタッフを抱えた安定運営が担保されないという問題がある。
 また、継続的に図書館運営を行うには指定管理者の資質の向上が不可欠であり、専門職員の確保、職員研修や待遇改善など今後起きてくる問題点も多いと考えている。

自治体の財政状況がますます厳しくなっていくなか、経費の節減のみに目を奪われると公立図書館の使命達成に赤信号が灯る恐れもあり、行政と指定管理者が対等な立場で図書館の将来について考えていく環境の構築も不可欠である。
 将来に対する試金石として頑張っていきたい。

(ふかい まさし)

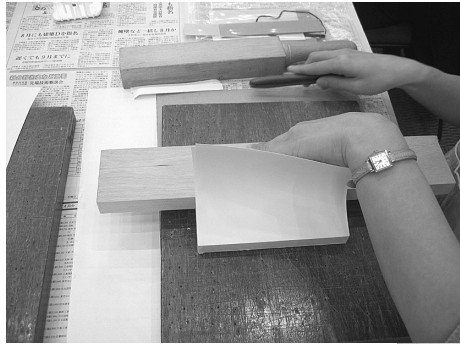
製本講習会報告

二月十六日に、岡山県立図書館で製本講習会が開催されました。キハラ株式会社から、高尾齊氏をはじめ三名の講師をお招きし、参加者数四十五名という多数のご参加をいただきました。

はじめに、本の構造と名称について、続いて製本工具・材料の説明を受けた後で実際の作業に移りました。今年度は文庫本にハードカバーを掛ける作業と、文集・論文等の小冊子製本(B4サイズの紙をまとめて製本)の二つを行いました。昨年まで行っていた絵本の製本や、和本の製本等は、来年度以降に計画しています。ご期待ください。



製本工具 (一部)



作業風景①

実技の説明を
輪になって聞く



基礎知識の説明



完成作品

場内をまわってアドバイス



作業風景②

平成十七年度教養講座

『岡山の文化と文化財』

講師・白井洋輔 氏
(吉備国際大学 社会学部教授)

●社会的現象をどのように見るか

文化財は現代を映してみせる役割を持っていて、時には違った視点で鮮烈に示してくれます。

かつて太平洋戦争終戦の頃の日本は「落第した優等生」と揶揄されました。今から十三年前のバブル崩壊の時また同じように言われ、「第二の敗戦」と呼ばれました。政治経済も社会も教育も、安定しているものが何もなく、混沌の域に達しています。国は国民一人当たり七百万円の借金をし、十五年前は世界のトップを走っていた経済は二十位台です。自己破産は年間二万二千件、自殺者は三万人もおり、そのほとんどが働き盛りです。教育でも、ゆとり教育を決めたと思ったら学力が落ちるといって慌てて覆すなど、一貫性がありません。本当は様々な人がいてそれぞれが輝いて、結果的に日本全体が輝く社会ができるのに、今の教育は栽培種のように全員を画一に揃えようとしてきました。その欠陥が今の状況を作っています。

振り返ると日本の文化にはいくつ

かの頂点がありました。不思議なこと文化の頂点はいつも激変の時代の直後にきています。そう考えると、現在の混乱や危機をチャンスと捉えることができれば、今後大きな花が咲く可能性があります。

●見えるものが全てではない

蛙は動くものしか見えないのです。その性質を利用して、蛇は蛙には見えないくらいゆっくりとしたスピードで近付いていき、捕えます。人間が、世の中の動くもの、流行や目に見えるお金、地位、偏差値などだけを見て、動かない本質的なものに興味を示せないとするばどうなるでしょうか。やはり蛙の目状態で目前に迫る危機も知らない危険な状態といえます。

文化庁の無形文化財公開事業の一環として伝統工芸展などで、そのすばらしさを子どもにも理解させる目的で人間国宝に実演を交えて話をしてもらっています。ところがどんな名人がすばらしい話をしても子供は五分とじつとしていないというのです。一方でろくろを回し出すと何分でも見えます。子供は見えるものしか理解できないのです。抽象的なものが理解できるのは大人になってからです。もし今、大人が目に見える動くものしか見ていないのであれば、

それは大人になりきつていないといふことです。

本質的なものは目に見えないという例を挙げますと、昭和三十年代の高度成長期、プラスチックは簡単に安いからいろんなものを駆逐していききました。でも当時誰一人「プラスチックには危険性もある」と言う人はいませんでした。それがどうでしょう。ダイオキシンの公害等に悩まされています。ものには二面性があり、悪いことは必ず遅れてやっつけてきます。

●嘘がつけぬ文化財

今の日本が間違っていないかどうか考えるときには基準が絶対に必要です。基準に文化財等「モノ」を用いれば、ものは嘘を言いませんから、どんな指標よりも正確だと思います。今の時代が底なのか、十年先二十年先にもっと悪くなっていくのか。時代の浮き沈みを把握するには、やはり歴史あるものを見なければなりません。

備前焼を例にとつて、今の人は備前焼の作家さんは繁盛して羨ましいと思つています。ところが「今備前焼が栄えているか」といったら違います。室町時代に兵庫北関（今の神戸港）を通過したものの全部を記載した古文書を調べてみると、当時備前

焼は日本の焼物市場全体の八十五％を押さえていました。今は日本の焼物市場の三十分の一です。このように備前焼の歴史だけとつても、今だけを見てみると本当のことは見えてきません。備前焼の歴史はどん底と絶頂を繰り返しています。それは作品に如実に表れていて、大甕を例に取れば、勢いのある時代は堂々としていり、勢いのない時代はすんと肩の張りが小さくなっています。どのような時代に繁栄して美しく輝き、どのような時代に衰退しているのかをヒントにして今を見ることが大切です。

●私が博物館で発見した事実

①モノほど忠実に時代を表すものはない。②博物館のモノは死んでいない。黙っているのはこちらが聞かないからで、聞けば聞くほど、見れば見るほどいろいろなことを喋ってくれます。③時代と共に大半のものが悪くなっている。建築も焼物も刀も工芸も、良くならない法則があります。すばらしいものはすばらしい技術で作られるのかというところであります。平安末期に作られた日本刀が一番すばらしくて、その後は千年たつても最初のを超えられません。製鉄技術が進むにつれ、当初は不純物が五十％もあり生産量

も少なかったものが、江戸時代になると純度、生産量ともに上がりました。ところが人間は横着ですから、技術が進み、良いものがあてがわれればそれだけ努力をしなくなり、ものは悪くなるのです。

鎧を例にとつても、平安末期のもは当時の工芸技術の粋を集め、豪壮で武士の勢いそのものを表しています。それは一人の職人が何年もかけて作りました。やがて時代が降ると分業して早くできるようになります。消費者が「あれも付けてくれ、これも付けてくれ」と注文を付け、職人はそれに応じてしまいます。今の車と一緒に移動できさえすればいいものを、ステレオやカーナビを付け、出来るだけ安くしようとあらゆるところで手を抜きます。ものを作る姿勢が全く違います。すばらしいものはすばらしい技術から作られるのではなく、その土地の風土から学んだ情熱と英知から作られるのです。

牛窓に本蓮寺の本堂という、五百年間屋根を替えたことがない建物がありました。大修理をした時は文化庁、建築学者など、大変な注目の的でした。五百年もの間なぜ屋根が腐らなかつたのでしょうか。解体すると瓦の下が壁土は列状に空洞で、屋根瓦の下がトンネル状になっていま

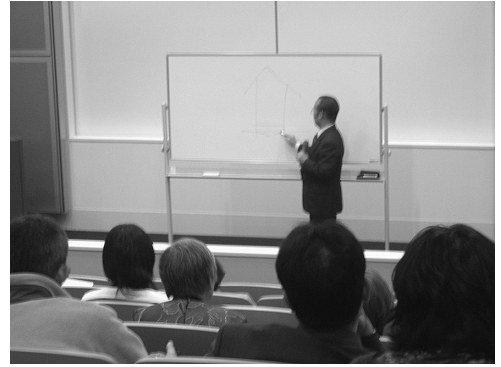
した。だから風が通って野地板が腐りません。しかも瓦の下の屋根土には凍結防止のため塩を混ぜてありました。こういう技法は、昔は普通でしたが、それを受け渡す人がいなかったから本蓮寺だけが唯一残つただと思えます。

先人を追い越せないのは、平安時代の甲冑、刀剣、桃山時代の文化、建築にしても、本質を伝えていないからです。伝えることは非常に難しいのです。なぜ難しいか。桃山時代が何年続いたかを考えればすぐわかります。たつた三十、四十年、ちょうど一世代です。桃山文化を作った人は、戦国の混乱の中を生きてきました。ところが次代の人は親が土台を作ってくれているから形式的に真似をするだけです。次も真似、また次も真似。真似する度に本質的精神は崩れていきます。

●航海に羅針盤は不可欠

混乱に巻き込まれた時に羅針盤は不可欠です。世の中が激変している時、過去から何も学んでいなければ、予測することもできません。過去・現在・未来と自分の視点でももの本質を見抜かないと、迷走はもつと激しくなります。今の人は、誰かが助けてくれると思ひ込んでいます。

江戸時代、倉敷の大橋家は、火事



が起きたとしても翌日から家を建て直すことができる、そういう備えをしていました。今は何もかも人任せです。重要文化財や国宝の修理でも、例えば台風で一枚の瓦が飛んだとします。これは国が管理するものだからと放っておきます。瓦一枚なら何千円で済んだのに、浸食が進んで何千万円も必要になります。誰が払うのか。国民です。大橋家の家の造りは、見た目は普通の商家と変わりませんが、英知の結晶のような家です。絶対ネズミが走らない天井裏、絶対すきま風が入らない壁等、外からは見えない所にも力を注ぐしつかりした生き方、日本人の姿を象徴的に見ることができません。

後樂園の延養亭は、見た目は書院造りの普通の家ですが、修理に一坪一千万円かけました。それに相応しい春日杉の名木や、それなりの材を使っています。軒支えの梁丸太は北山杉の、根元と先が同じ太さで非常に長いのを使うなど、工夫を凝らし見えない所にお金をかけ、かつての岡山県人の美意識がうかがえます。

●岡山文化のエッセンスは何か

岡山文化は見えないものにもこれでもかこれでもかと力を注ぎ込んで天下を制した、独特の哲学を本能のようにもっている文化ではないかと思えます。

岡山文化はある意味では発想において常識外れのことをしています。とりわけ優れた素材を使っているわけではありません。刀の場合、備前の鉄は赤目鉄といって純度の低い鉄なのに、出来上がった刀は誰も真似ができないほど素晴らしいものです。刀というのは大きな矛盾を抱えたものです。折れず曲がらず斬れて美しくなければなりません。刀作りになぜボロ鉄がいいのか。良い鉄を使えば良い刀ができるはずですが、ボロ鉄は最後どんな風に影響してくるのでしょうか。

延々繰り返します。純粋な鉄では十回以上で鉄がばらばらになります。不純物を多く含む鉄では十五回行ってもびくともしません。しかも他の産地よりも鉄を沢山使います。できあがりはどこにも負けない、重過ぎず厚過ぎず大き過ぎず、ちょうどいい刀です。つまり普通以下の素材に、大量の情熱とエネルギーを注いでいるのです。また、備前刀だけが七百八十度という低温で焼入れをします。他の産地は八百三十度という高温です。備前刀は、刀剣を構成している素材が最後まで死なないように低温で焼入れするのです。

できた例しは日本の歴史の中でありません。そのことを最もよく教えてくれるのが岡山の文化ではないでしょうか。

あるいは牛窓の造船をとってみても、牛窓の船はきれいで速く走れて長持ちするという定評がありました。なぜなら牛窓の船は、日本で一番多くの種類の材を集めて使っているからです。様々な素材を、適材適所に使って全体を作り上げると、それぞれの部品がそれぞれの部分で輝きます。全ての部品を大事にしているのです。

岡山文化の神髄は、異質な物が集まって、手間暇惜しまず、しかも素材を殺していません。こういう文化であったからこそ、次から次へと色々なものを残してきたのだと思います。

●岡山文化への期待

岡山は歴史的に見ると、弥生時代の終わりから古墳時代の始めにかけて日本のリーダーになっていきます(古代吉備王国)。あるいは古代から中世の境目も、人の生き方がわからなくなつた時に、鎌倉新仏教という思想的な面で法然、栄西が日本を救いました。そしてそれをサンドイッチするような形で備前刀、備前焼が天下を制していきました。

折れないためには柔軟性が、斬れるためには硬さが必要です。この矛盾を解決する作業が折り重ねで、鉄を半分には畳んではまた伸ばすことを



白井先生の著作を展示

それから現代の教育にからんでいますと、今の教育は沖繩から北海道までみんな一緒で、人間を栽培種にしてしまっています。野生種の稲と栽培種の稲を比較すると、野生種は最初種を百粒蒔くと三十粒くらい芽が出ます。翌年以降も出続け、百年経ってもまだ出ます。栽培種は誰かに都合のいいように作られていて、それは突発的な干魃とか冷害には非常に弱いのです。初年度に百粒蒔けば百粒芽がでますが、三年目にもなるとほとんど芽が出ません。それぐらい栽培種というのはしたたかさのない弱いもので、今人間も弱くなっているといえます。

後楽園は、大正十一年に名勝の指定基準ができた時に栗林公園と兼六園と共に最初に選ばれました。昭和

二十七年に特別名勝の制度ができた初年度には、その中で後楽園だけが選ばれました。地方にあつてなぜ後楽園がこのようにすごいのかというと、日本庭園史の縮図だからです。後楽園に行けばそれぞれの時代のものが全部揃っています。こういう岡山の文化を子どもにも伝えてほしいです。ありきたりのポロ土やポロ鉄から最高のものを作り上げることに象徴される岡山の文化が、今こそ脚光を浴びる時ではないかと思えます。

※この文章は十二月十三日に開催された「教養講座」の内容を要約したものです。

「教養講座」の内容を要約したものです。

◎平成十八年度(第九十二回)

全国図書館大会(岡山大会)

十月二十六・二十七両日に開催される全国図書館大会のテーマが決まりましたのでお知らせします。多くのご参加をお待ちしております。

☆大会テーマ☆

晴れの国岡山から未来へ向けて

広げよう図書館の可能性

☆分科会テーマ☆

第一分科会(公共図書館)

図書館サービスにさらなる広がりをも

〜二〇〇六年・岡山からの発信〜

第二分科会(大学・短大・高専図書館)

高めよう!学生の図書館利用満足度

第三分科会(学校図書館)

学校図書館にできること

第四分科会(児童・青少年サービス)

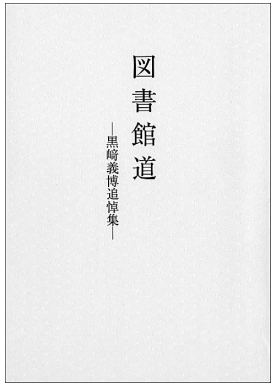
子どもの読書生活を育む

〜自立した読書をめざして〜

◎「図書館道」

―黒崎義博追悼集―

当協会に多大な功績を残された黒崎義博氏の追悼文集が完成しました。



図書館道

―黒崎義博追悼集―

「生涯・活動分野」「思い出のアルバム」「追悼」の三部構成となっており、黒崎氏の人が偲ばれるとともに、岡山の図書館の歴史を知ることができるといえます。

【問い合わせ先】

岡山市立中央図書館
住所 岡山市二日市町五六
電話(〇八六) 二二三―三三三七

●異動等をお知らせください

年度末を迎え、会員の皆さまの所属・住所等の変更も多いのではないかと思います。その際は、お手数ですが事務局までお知らせください。また、入会・退会を希望される方がおられましたら、あわせてお知らせいただけますと助かります。御協力よろしくお願ひします。

●編集後記

今回の会報、いかがだったでしょうか。原稿・情報を提供してくださった方々には大変お世話になりました。教養講座については、文化財のみならず教育や現代人の生き方にまで話が及ぶ興味深いものでしたが、紙面の都合で省略せざるを得なかったのが残念です。

この会報の発行をもって今年度の事業が終了しました。来年度も、会員のみならず喜んでいただけるような研修会を開催したいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

平成十八年三月三十一日
〒七〇〇―〇八三三

岡山市丸の内二一六―三〇

岡山県立図書館

メディア・協力課図書館協力班内

岡山県図書館協会

会長 松井英治

(〇八六) 二二四―二二六九